慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Herman Paul, Aufgabe und Methode der Geschichtswissenschaften.1920
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.9 (1921. 9) ,p.1352(140)- 1355(143)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

誠實才能膽略に於て、舊政府當局者に勝るものが多いと云ふのは恐らく事實であらう。果して然りとすれば、レエニン等が必要已む事を得ず、其の最初に標榜するところを修正若くは放棄して、漸次資本主義的制度に復歸しつゝあると云ふ報導が事實であつても、（而してそれを事實と信ずべき理由は充分ある）其は必しも露西亞人の爲めに幸とは云はれぬであらう。本書の論斷に對しては固より異論を抱く者はあるべき筈であるが、學說史的博涉と記述の正確とは著者平生の長技であるから、此一點は充分信賴することが出來る。而して本書中に引用するもの以外、更に遡つてボルシェヰズムを研究せんと欲するものの爲めには Diehl und Mombert, Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Oekonomie Bd. XI. は、其三百四十四頁に獨逸語の重なる文獻を列記して居る。

本書は辛うじて百頁を超える小冊で、固より近時に於て特に注目を要する著作と云ふべきものではない。以上稍々長きに亘つて之を紹介したのは其の取扱ふところの問題の重要なるが爲めである。（小泉信三）

Herman Paul:—Aufgabe und Methode der Geschichtswissenschaften. 1920

「言語史原理」"Prinzipien der Sprachgeschichte." の著者として斯界の權威たるパウルの方法論はよし僅々菊版六十頁に足らざる小冊子なるにもせよ、尙ほ吾人文化科學研究者にとつて一讀の價値あるものと信ず。勿論其の方法論なるや著者の專門たる言語學を偏重するの傾ありと雖も、又吾人に益を與ふること少しとせず。故に以下其の大意を述べて是を紹介し、大方の一讀を奬めんと欲す。

パウルは其の科學を分類するに當つて、自然科學（Naturwissenschaft）なる語は唯物質の科學（Wissenschaft von der Materie）にのみ限り、心理學の如き精神的狀態及び行爲を對象とするものは包含せず、（二頁）是等を一括して法則科學（Gesetzeswissenschaft）と名付け、歷史科學（Geschichtswissenschaft）に對立せしむ。而して又こゝに歷史的自然科學（historische Naturwissenschaft）なるもの存し、（例へば地震、噴火等の記錄に基くもの）自然科學と歷史科學との中間に介在す。（一〇頁）然らば法則科學と歷史科學とは如何なる點に於いて相違するか。其の區別は唯法則科學が個々の要素を孤立し、「其の性質に從つてのみ觀察するに、歷史的研究はある結合が一定の場所一定の時に形成されることを確立するに向はんとする點にあり。」（一四頁）是等の點に關する議論は未だリッケルトの峻嚴なるに如かず。更に氏は歷史科學及び法則科學を觀察するに當つて必要なる方法の研究、例へば言語の研究の如きを名付けて「原則科學」（Prinzipien-wissenschaft）と云へり。是に就いては尙ほ後に述ぶる必要あれば、こゝには省略す。

吾人は暫く眼を轉じて氏の人生觀を一瞥するの要あり。氏に從へば人類の精神と肉體とは相離れて存するものにあらず。精神は肉體に作用し、肉體は精神に影響す。今吾人の行動（Bewegung）を考察するに感官的刺激に基く反射運動あり。そは全然吾人の勝手氣儘にならざるものなれど、是に對して他に吾人の自由になるもの存す。即ち吾人の意思に依つて肉體の行動を支配せんとするものにして、そは練習（Einübung）に依りて獲得せらるゝものなり。然れども人類の行動には更に他のもの存せり。吾人はある目的に到達せんが爲めに、其の手段たる道具を作る。即ち人類はある完全なる道具を作らんが爲めに、自然的對象物に向つて働くことが先づ最も近き目的にして、「道具の生產及び斯くの如き道具の補助に依つてなされる生產が更に又道具を生ずるに至る。」（一八頁）此の意味に於いて鐵道も道路もすべて一の道具に過ぎず。而して其の見地が深く廣くなるに從ひ、其の目的に役立てんとする行動は益々高からざるを得ず。然らば人間と人間との交涉は如何。勿論人類の進化は是等の交互作用を待つて始めて生ずるも

のなり。然れども直接ある一の精神と他の精神とは交渉し能はず。必ず外界の表象として肉體の仲介するを要す。而して此の肉體の媒介の發達に關して、氏は最も興味多き敍述をなせど、こゝにはすべて割愛す。讀者は直ちに本書及び前掲「言語史原理」に就きて、如何にして人類が意思を表現せんとしたるか、其の變遷の跡を辿らるべし。要するに其の結論となすものは、交互作用の最も完全なるものとして現在の發音言語（Lantsprach）發達するに至り、（言語には Gebärden-sprache とて容貌を以つて意思を表示するものあり、）一つの精神と他の精神と略々完全に交渉し得るに至れり。（二六頁）而して文化が進歩するは是等の交互作用が更に廣きに亘ればなり。例へば各家族がその消費物をそれ自身生産する原始的經濟階段と現在の如き交易經濟時代とを比較すべし。其の間の文化の相違は極めて歴然たるべし。他方更に吾人が過去の事實を熟知することは又文化の進歩に貢獻あり。然し乍ら其の歴史的研究の主たる任務は「過去の時代に生せる文化價値を崩壞より保護し、而してすでに現在に隱されたる點を新生活に喚起する」ことにあり。（五三頁）尙ほ其の歴史研究の方法、殊に其の偶然論（Zufall）其の他（四〇頁以降）興味多き議論あれど、他に紹介すべき機會ありと思惟するが故に、こゝにはすべて省略し、直ちに以上の如き觀察と其の科學論との關係を略述すべし。

歴史的科學の眞の目的は世界に於ける吾人の指向法（Orientierung）を求むるにあり。而して事物間の因果關係を究める範圍に於いて眞の科學たることを得べし。そは個々の事實を孤立的に明白にすることを以つて滿足すべきにあらず。因果律の認識に比較（Vergleichung）は缺くべからざるものなり。現象間に於ける一致（Übereinstimmung）は正確なる分析に依つてのみ到達し得。而して斯くの如き一致の方法を系統的に研究せんと努力する時、こゝに原則科學を生ず。斯くの如き原則科學は正確なる細節研究（Detailforschung）と相伴ふて始めて價値あるものなり。故に原則科學は發展に於ける目的意識の聯結の爲めに、歴史的研究をあらゆる方面に於いて利用すべきものなり。而して如何なる動機に依つて最初より條件づけられたるか。又其の動機は繼續せりや。是等を熟考し、以つて一方古きを確立すると共に、他方新しきを評價す。それ等の研究に對して言語の研究は資するところ極めて大なりと思考す。（五六頁以降）

以上本書の大體を紹介せりと考ふ。尙ほ是等に關する問題は目下本誌に連載中の拙稿「經濟史研究に就いて」と密接の關係あり就きて參照せられんことを希望す。（野村兼太郎）

野村兼太郎著　改版　經濟的文化と哲學

芝三田國文堂發行　四六版五〇八頁

經濟學における一新傾向は、經濟學の哲學的考察であらう。著者野村氏は、夙に此の傾向に着目し、之を研鑽せられること頗ぶる深いものがある。本書の第一版の上梓せられたのは昨年の六月であつた。從來一ヶ年本書に對する學界の需要は、本書の著者をして第四版を出版せしめるに至つた。改定第四版においては「全體に亘つて文意其の他の訂正をなし、更らに第四篇と第五篇とに其後發表した論文を各一章（「古代における家族制」「ギルド社會主義の根本觀念」）づゝ增加した。」（序文）評者は今全體に渉つて、舊版と改版とを比較するの餘裕を持つてゐなかつたので、改版讀過の際における感想を述べるに止めやうと思ふ。

本書の序「眞を求めて」は洵に朗々誦すべき名文である。讀者は何人と雖も、その流麗な筆致に魅せられざるを得ないであらう。この名文を讀み了つて、第一篇科學としての經濟學に入るに及び評者は高橋教授の本書舊版に對する批評を想起せざるを得ない。曰く「第一篇に移るに及びて、吾人は又た其の結構の雄大なるに驚かざるを得ず、又何人も著者の哲學的智識の富